

## 論 文

# 課題解決型会話の談話展開と提案の可決・否決

## 母語場面と第三者言語接触場面の対照

渡 辺 文 生

### 1. はじめに

本研究の目的は、課題解決型授業の擬似的場面を設定して収集した日本語母語話者同士による談話データ（母語場面）と日本語学習者同士が「共通語としての日本語（Japanese as a lingua franca : JLF）」を用いて話し合う談話データ（第三者言語接触場面）をもとに（竹井・吉田 2018；竹井ほか 2018）、談話の展開のあり方と提案の可決・否決に関してそれぞれのデータに観察された特徴的な発話連鎖の質的な分析・考察をすることである。分析の観点としては、談話の単位の「話段」と提案行動に関わるストラテジーを用いる。

本研究で分析の対象とするデータは、異なる言語文化を背景とした学生によって構成される学びの場において「共通語としての日本語」がどのように使われているかを調査する目的で収集されたものである。収集されたデータには、母語場面と第三者言語接触場面のほかに、日本語母語話者と日本語学習者による相手言語接触場面のデータ<sup>1</sup>もあるが、本研究では、日本語母語話者が会話に参加していない第三者言語接触場面の課題解決型会話に焦点を当てることで、「共通語としての日本語」による言語行動に関する課題が浮き彫りになるのではないかと考える。まとめにおいては、本研究の分析・考察結果から得られる日本語教育への示唆について述べる。

### 2. 課題解決型会話についての先行研究

課題解決型会話に関する先行研究としては、桑原（1996,1998）、若野（1998）、野原・藤江・宮谷（2002）、星野（2010）などが挙げられる。桑原（1996,1998）は、日本語母語話者同士の主に公的な多人数による会議の会話をデータに用い、提案行動の談話構造とストラテジーを分析している。若野（1998）は、大学サークルのミーティングにおける日本語母語話者の多人数会話をデータに用いて、提案の可決・否決を決定する際に使われるストラテジーを分析している。野原・藤江・宮谷（2002）は、初対面の日本人大学生4名と留学生3名の計7名からなるグループの会

1 本調査による相手言語接触場面のデータについては、竹井・吉田（2018）に母語話者の言語行動と意識という観点からの分析がある。

話を対象に、提案から同意への過程を分析している。星野（2010）は、大学生の4人グループによる会話をデータに用い、会話参加者が先行のやりとりを受けどのように応答を重ねているかという観点で、提示された意見に対する肯定的な発話連鎖、否定的な発話連鎖、停滞した話し合いに転換を与える発話連鎖などを取り上げて分析している。

本研究は、談話を「話段」という単位を用いて分析している点、会話参加者の戦略に基づく分析を行っている点で、桑原（1996,1998）と若野（1998）の分析方法に依拠するため、それらの先行研究の分析方法と結果について取り上げる。「話段」とは、相対的な内容上のまとまりとして成立する談話（話し言葉）の言語単位（佐久間 1987）で、それぞれの会話参加者の談話の目的によって相対的に他と区分される部分（ザトラウスキー 1993）である。戦略とは、談話のやり取りの中で各参加者が目的を達成するために用いる手段（ザトラウスキー 1993）にとらえる。

桑原（1996）は、提案行動を開始時の契機によって「要請型」と「自発型」の2つに分類した。「要請型」の提案行動では、まず検討課題が提起され、「情報授受」・「条件設定」を経て複数の「提案」と「反対」の話段が現れて、最終的に一つの提案遂行が決定されるのに対し、「自発型」の提案行動では、課題が示され、「誘導」の話段の後、単独の提案について「提案」と「反対」の話段が交互に現れ遂行か却下の提案に至ると述べている。桑原（1998）では、提案行動における「提案」と「反対」の話段について、ザトラウスキー（1993）を参考にして分類した発話機能、特に「相手の考えを変えさせるなど、相手を動かそうとする」機能をもつ「操作」の発話を手がかりにして会話参加者の戦略を分析した。提案の可決に至る「提案」の話段では、提案が参加者相互の補い合いによってまとめられる・提案内容が反復されたり言い換えられる・提案の肯定的評価やあいづちが頻出する等の特徴を指摘している。提案の否決に至る「反対」の話段では、提案者自身の提案取り下げの発話が決定的な役割を果たしており、特に、上位者の提案は提案者自身が却下していたと述べている。

若野（1998）も、ザトラウスキー（1993）による発話機能の分類を基に、提案の可決・否決を決定する際に使われる戦略を分析した。提案の可決については、複数の参加者が連続して〈提案支持〉をすることや、提案の聞き手が提案者と一緒に〈提案説明〉の発話をするなどによって決まると指摘している。提案の否決については、〈提案懸念〉がなされた後、会話参加者がその〈提案懸念〉に納得してだれもその提案に触れなくなることによって、否決されたことになる」と述べている。これを若野（1998）は「闇に葬る」形だと呼んでいる。可決・否決をめぐって意見が分かれたときは、〈提案懸念〉に対して会話参加者がどのような行動をとるかによって可決・否決が導かれることになる。たとえば、提案の支持者が、反対者の〈提案懸念〉に納得していないことを伝えるなど〈提案懸念〉に対して反論することは、問題となっている提案を引き続き話題にし、闇に葬らせないという意味でも効果的だと述べている。また、「いやだ」「そうではない」といった、直接相手の発言を評価する発話はなされなかったとのことである。結論と

して、提案の可決は直接的だが、提案の否決や意見の不支持を表すストラテジーは間接的であり、否決の間接化の方法として、反対者が提案に対するマイナス要因を提示し、他の参加者が何も発言しない場合は提案が否決されたとみなすという談話展開を指摘している。

### 3. 調査の概要

2016年6月～2017年6月に日本国内の大学において日本人学生、学部留学生・交換留学生18名(延べ)を調査参加者として、母語場面(日本人学生3名)、第三者言語接触場面(留学生3名)、相手言語接触場面(留学生2名+日本人学生1名)の各場面2グループの計6グループの会話データを収集した(竹井・吉田 2018)。本研究ではそのうち母語場面2グループと第三者言語接触場面2グループのデータを取り上げて分析する。調査参加者の内訳は以下の通りである。

表1 グループ別調査参加者の内訳<sup>2</sup>

グループ	個人コード	母語	身分	日本語レベル
母語①	JP_M2	日本語	学部生	母語
	JP_F1	日本語	学部生	母語
	JP_M1	日本語	学部生	母語
母語②	JP_M3	日本語	学部生	母語
	JP_M4	日本語	学部生	母語
	JP_F2	日本語	学部生	母語
第三者言語接触①	CN_F1	中国語	学部留学生	N1
	KR_F1	韓国語	交換留学生	N1
	NZ_M1	英語	交換留学生	N3
第三者言語接触②	TW_F1	中国語	交換留学生	N1
	VN_F3	ベトナム語	交換留学生	N2
	NZ_M2	英語	交換留学生	N2

調査においては、PBL型授業における言語使用に近い疑似的場面(課題解決型三人会話)でのインターアクションを分析するため、「附属高校から大学体験の目的で訪問する女子高校生10名のために、大学生活を知ってもらうためのプログラム内容(キャンパスツアーなど)を計画する」という課題を調査参加者に与えて会話を行ってもらった。調査参加者は、入室後に教員から課題の説明を受け、教員退室後に課題遂行のためのディスカッションを開始する。30分後に教員が再入室し、計画案の発表および感想を口頭で求める。この一部始終について録画・録音を行っているが、分析の対象としたのは課題遂行作業の部分のみである。

調査参加者は、会話のあいだに話し合いの結果を計画書にまとめることも求められた。表2は、母語②グループが作成した計画書をほぼ同じイメージのまま表したものである。計画書は、計画

<sup>2</sup> 個人コードは、出身国\_性別・話者番号を示す。JPは日本、CNは中国、KRは韓国、NZはニュージーランド、TWは台湾、VNはベトナムを表す。日本語レベルはJLPTによる。

するプログラムごとに時間・場所・内容を記入するようになっており、最初の「出迎え」と最後の「見送り」については、時間・場所ともに記入済みであった。調査参加者は、「出迎え」と「見送り」のあいだのプログラム内容の計画を求められたことになる。

表2 母語②グループによる計画書

時間	場所	内容
10:00~	〇〇駅前	出迎え
10:10~11:10	図書館	<ul style="list-style-type: none"> <li>・図書館までの道のり</li> <li>・書庫なども（説明しながら）</li> </ul>
11:10~11:50	9号館	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学部の先生に説明していただく</li> </ul>
12:00~13:00	食堂	<ul style="list-style-type: none"> <li>・昼食</li> <li>・自由時間</li> </ul>
13:00~14:00	5, 6号館	<ul style="list-style-type: none"> <li>・キャンパスツアー 授業参観</li> <li>その他施設</li> </ul>
14:00~14:45	交流ラウンジ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・留学生, 大学生と交流 グループ分け（質問も）</li> </ul>
15:00~	バス停	見送り

表2の計画書は、会話参加者が何について話し、何について合意したかをまとめたものにとらえることができる。否決された提案内容は、当然ながら書かれていないが、可決した内容の客観的根拠を与えるものである。次節で述べる話段の認定作業においては、これらの計画書に書かれた単語をキーワードにして分布を調べ、その結果を認定の手がかりに用いた。

#### 4. 各グループの調査データの分析

ここでは、話段の認定作業をもとに各グループの調査データの談話展開をとらえた上で、提案の可決と否決に関わる特徴的な発話連鎖について分析を行う。話段の認定作業の手がかりとしては、南（1983）が言語単位の認定基準として挙げた「表現された形そのもの」「参加者」「話題」「使用言語」「コミュニケーションの機能」「媒体」「表現態度（フリ）」「全体的構造」の8種類と、ザトラウスキー（1993）が話段区分で重視した発話機能を用いて、総合的に判断した。それらの中でも特に重要な手がかりとしては、南（1983）の基準の「表現された形」と「話題」が挙げられる。前者は、「じゃあ・次に」などの接続形式を手がかりとし、後者の「話題」については、会話参加者が書いた計画書を手がかりとした。

##### 4. 1 母語①グループ

母語①グループによる調査データの話段に基づく談話展開は表3に示す通りである。話段は重

層的なものであるため (佐久間 2006; 渡辺 2013), 「開始部」「展開部」「終了部」と呼ばれる最も高次元の大話段や, この表に挙げた話段より下層の小話段もあるが, ここでは話段の多重構造のうち談話全体の流れの特徴を捉えるために, 「開始部」「展開部」「終了部」より一段下層の話段を示している。(イベント6) などとあるのは, 計画書において最初のイベントである「出迎え」をイベント1としたときに, その話段の話題の内容が何番目のイベントであるかを表している。

表3 母語①グループの談話展開

話段	発話数	%
1 談話開始のあいさつ	4	0.5%
2 アイデア出し	75	8.8%
3 昼食 (イベント6) について	13	1.5%
4 授業体験 (イベント2) について	74	8.7%
5 図書館見学 (イベント4) の検討	28	3.3%
6 授業体験 (イベント2) について	7	0.8%
7 午前中の行事の流れについて	29	3.4%
8 計画書の記入作業	8	0.9%
9 授業体験 (イベント2) の先生について	19	2.2%
10 掲示板 (イベント3) について	32	3.7%
11 図書館見学 (イベント4) について	166	19.4%
12 新学部の説明 (イベント5) について	24	2.8%
13 学食での行事 (イベント6) について	16	1.9%
14 電子マネー (イベント6) についての雑談	18	2.1%
15 サークルの説明 (イベント7) について	83	9.7%
16 計画検討の終了の確認	5	0.6%
17 担当者の検討	241	28.2%
18 タスク終了の確認	12	1.4%

母語①グループの会話では, 最初に昼食の時間帯を決定し, その後, 午前中の行事, 午後の行事と検討を進めている。昼食以外は, ほぼ時系列に沿ってイベントを検討しており, 後で時間帯を入れ替えたり新たなイベントを導入したりという修正が少ないことが特徴と言える。課題解決や提案の可決・否決に結びつかない話題が内容となっている話段を「雑談」の話段とすると, 表3に示した話段の層では, 話段14のみが雑談の話段であるが, イベントについて検討している話段に埋め込まれる形で雑談の小話段が分散して含まれている。

(1) の発話連鎖は, イベントについてのプレーストーミングを行っている話段2「アイデア出し」のうちの, 「図書館でのイベントを提案する小話段」に続く「9号館での新学部説明についての小話段」の冒頭部である。「9号館」を見せてはどうかというJP\_M1による発話01の〈提案〉に対し, 発話02でJP\_M2が〈提案懸念〉を行っている。JP\_M1は, JP\_M2の「9号館?」という疑問形の発話による〈提案懸念〉が予想していなかった対応なのか, 発話03で「え?」と意

外性を示す「注目表示」の発話をしている。JP\_M2の〈提案懸念〉に対して、発話04～05で JP\_M1と JP\_F1の共同発話による〈提案説明〉があり、〈提案懸念〉を発した JP\_M2による発話07の「なるほど」によって〈提案支持〉が示され、〈提案〉が受け入れられている。

(1) 母語①グループによる新学部説明についての発話連鎖<sup>3</sup>

- 〈提案〉 01 JP\_M1 9号館。  
 〈提案懸念〉 02 JP\_M2 9号館? [まだこれできて、できてねえよ。  
 03 JP\_M1 [え?  
 〈提案説明〉 04 JP\_M1 でも、ここになん [か、その、栄養。  
 の共同発話 05 JP\_F1 [できるんよみたいな?  
 〈提案説明〉 06 JP\_M1 そうそうそう。栄養 [系統。  
 〈提案支持〉 07 JP\_M2 [ああ、なるほど。(1.0)  
 08 JP\_M2 [で、あと、xxxx。 ああ ああ  
 〈提案説明〉 09 JP\_M1 [一応その合併したっ [ていうのもあって。[できたんよっていうのが。  
 〈提案支持〉 10 JP\_F1 [ああ [なるほど。

(1) の発話連鎖では、若野 (1998) の指摘の通り、反対者の〈提案懸念〉に対して、提案者および提案の支持者が〈提案説明〉することによって反論し、その結果、反対者の〈提案支持〉を呼び起こしている。提案の可決については、桑原 (1998) の指摘のように、あいづちが頻出することによって〈提案支持〉が繰り返され、可決したことが示されている。しかし、JP\_M2による02の発話の〈提案懸念〉は、直接的な不支持表明ととらえられ、その点は意見の不支持を表す戦略は間接的だとする先行研究の指摘と異なっている。JP\_M2が直接的に〈提案懸念〉を行うことができた要因としては、いろんな意見を出し合うブレインストーミングの段階での発話のやりとりであること、会話参加者の3名が初対面ではなく知り合い同士であったこと、JP\_M2が3名の会話参加者のうちで一番年長であったことなどが考えられる。

次に、(2) の発話連鎖は、計画した各イベントの担当者を検討する話段17の「図書館見学の担当者についての小話段」に続く「新学部の説明の担当者についての小話段」の冒頭部である。まず、発話01および発話02の JP\_M2と JP\_F1による共同発話で〈提案〉が行われる。それに対して JP\_M1が発話03で〈提案懸念〉を示す。提案者の JP\_M2と JP\_F1は、発話04と発話05で JP\_M1の〈提案懸念〉を否定する態度表明を行うが、反対者の JP\_M1は発話06で直接的に〈反対〉を表明している。すると、JP\_F1が発話07～08で〈反対〉を支持し、JP\_M2も発話09で間接的に〈反対〉への同意を示す。発話09の「カメラ目線どう?」との発話は、JP\_M1に「カメラ目線で言っ

3 発話連鎖の表示において、記号 [ は、発話の重複を表す。xxxx は聞き取れない部分、( ) 内の数字は沈黙の秒数を表している。

てはどうか」という〈反対〉の発話を促す発話で、暗に〈反対〉を受け入れていることを表している。発話09の促しを受けて、JP\_M1は発話10で〈反対〉の発話を繰り返し、発話11~12のJP\_M2とJP\_F1による笑いによって提案否決の受け入れが示される。

(2) 母語①グループによる新学部説明の担当者についての発話連鎖

- |          |    |       |                          |
|----------|----|-------|--------------------------|
| 〈提案〉     | 01 | JP_M2 | で、新学部の説明は (1.0) [学長 (笑)。 |
|          | 02 | JP_F1 | [学長 (笑)。                 |
| 〈提案懸念〉   | 03 | JP_M1 | いや、学長は (1.0) 話長くないですか。   |
| 〈提案懸念〉を  | 04 | JP_M2 | 何で? あ (2.0)              |
| 否定する態度表明 | 05 | JP_F1 | あ (笑)。                   |
| 〈反対〉     | 06 | JP_M1 | いや、そこに 学長出さなくてもいい [と思う。  |
| 〈反対〉     | 07 | JP_F1 | うーん [ま、確かに。              |
| への支持     | 08 | JP_F1 | 学長 [をわざわざ出すのはちょっと。       |
|          | 09 | JP_M2 | [カメラ目線どう? カメラ目線 [どう。     |
| 〈反対〉の復讐  | 10 | JP_M1 | [学長いいっす。要らないっす。          |
|          | 11 | JP_M2 | (笑)。                     |
| 否決の受け入れ  | 12 | JP_F1 | (笑)。                     |

(2) の発話連鎖では、反対者の〈提案懸念〉に対してそれを否定する提案者の態度表明があるにも関わらず、反対者がさらに直接的に〈反対〉の発話を行っている点が特徴的である。直接的な〈反対〉が行われる要因としては、〈提案〉の発話01~02における笑いが示唆するように、この〈提案〉自体がそれほど強い提案ではないということ、〈提案〉の内容がイベントの担当者というような計画の副次的事項に関するものであることなどが考えられる。

母語①グループによる (1) および (2) の発話連鎖からは、談話展開の中の話題の位置づけや、会話参加者の人間関係によっては、提案の否決や意見の不支持を表すストラテジーが直接的になりうるということが示唆される。これらの発話連鎖は、表3が示す談話展開の中では、課題を実質的に検討する最初と最後の話段であり、それらの内容的な性質から直接的な〈提案懸念〉や〈反対〉が生じたものと思われる。

#### 4. 2 母語②グループ

母語②グループによる調査データの話段に基づく談話展開は表4に示す通りである。母語①グループの会話と同様に、昼食を検討した後、概ね時系列に沿ってイベントを検討していき、話段13までで一通り計画を作るが、話段15でのキャンパスツアーの内容の検討、および、話段16での新イベントの導入がある。その他、母語①グループの談話と異なる点としては、話段2, 17, 18,

22など作業の進行に関わる話段が多いところ、計画の最終案が固まってから計画書の記入作業を行っているところが挙げられる。

表4 母語②グループの談話展開

話段	発話数	%
1 談話開始のあいさつ	3	0.4%
2 検討方法についての合意形成	11	1.4%
3 アイディア出し	43	5.5%
4 昼食（イベント4）の検討	74	9.4%
5 授業見学（イベント5）の検討	40	5.1%
6 図書館見学（イベント2）の検討	26	3.3%
7 9号館見学（イベント3）の検討	29	3.7%
8 出迎えから移動の所要時間について	48	6.1%
9 午前中の行事の検討	59	7.5%
10 キャンパスツアーと授業見学（イベント5）の検討	34	4.3%
11 留学生との交流（イベント6）とバス停への移動（イベント7）の検討	22	2.8%
12 集合・解散場所についての雑談	23	2.9%
13 スケジュール全体についての確認	27	3.4%
14 オープンキャンパスについての雑談	49	6.2%
15 キャンパスツアー（イベント5）の内容について	51	6.5%
16 自由時間（イベント4）の検討	28	3.6%
17 談話の経過時間について	12	1.5%
18 誰が提出書類を書くか	17	2.2%
19 計画書の記入作業	153	19.5%
20 タスク終了の確認	8	1.0%
21 実際のキャンパスツアーの回る場所について	11	1.4%
22 発表者について	17	2.2%

(3) の発話連鎖は、一通り計画を作った後にキャンパスツアーの内容を検討する話段15に続いて、自由時間という新たなイベントを導入する話段16の冒頭部である。まず、話者 JP\_M3は、発話01で「生徒ってさー、自由時間欲しいと思うかな。」と自由時間について話題提示し、その導入について間接的に〈提案〉を行う。しかし、その発話に対して他の会話参加者から何の反応もなく、1秒間の沈黙を〈提案〉に対する消極的な態度と解釈し、JP\_M3自ら発話02で「時間ないもんね。」と〈提案懸念〉の発話をしている。これは、〈提案〉の主張の強さを緩和し、他の会話参加者が〈提案懸念〉を行いやすくする働きを持ち、一種の気配り発話（ザトラウスキー1993）をとらえることができる。それを聞いた JP\_F2と JP\_M4は、発話03～04で同内容の発話をして〈提案懸念〉への同意を表している。そして、JP\_M3も05で同内容を繰り返し、この〈提案〉の否決を受け入れる発話を行う。しかし、2秒の沈黙の後、JP\_F2と JP\_M4は、発話06～07で01の〈提案〉を独立したイベントではなく昼食の時間に組み込むという折衷案を〈提案〉する。この折衷



案の〈提案〉を受けて、JP\_M3は発話08で折衷案への〈提案支持〉を行う。それ以降、発話09から発話13まで3名の会話参加者が折衷案の中身についての合意を形成する。そして、発話14~16で再度〈提案支持〉が行われ、折衷案の提案が可決する。

(3) 母語②グループによる自由時間の導入についての発話連鎖

- 〈提案〉 01 JP\_M3 学生ってさー, 学生, 生徒ってさー, 自由時間欲しいと思うかな。(1.0)
- 〈提案懸念〉 02 JP\_M3 要らんか。でも, 時間ないもんね。
- 〈提案懸念〉 03 JP\_F2 あ, 時間 [なさそうです。 うん
- への同意 04 JP\_M4 [時間ない。
- 05 JP\_M3 時間ないよね。(2.0)
- 折衷案の 06 JP\_M4 自分で探検する時間みたいな。
- 〈提案〉 07 JP\_F2 それを昼の中に入れちゃうか。 うーん。
- 〈提案支持〉 08 JP\_M3 あ, もう自由時間でーみたいなの (1.0) 感じで。
- 09 JP\_M4 あー, 昼食[は。 [食べたら。
- 10 JP\_M3 [じゃ, もう, 昼食はもう全部自由時間って形 [で。
- 11 JP\_F2 (1.0) 自由?
- 12 JP\_M4 食べたら, [自由? あー
- 〈提案説明〉 13 JP\_F2 [1時には戻ってきてくださいねっていうふうには。
- 14 JP\_M3 なるほど。
- 15 JP\_F2 そうしても。 いいかな。
- 〈提案支持〉 16 JP\_M4 いいと思いますよ。

(3) の発話01では、間接的な表現で〈提案〉が行われているが、一通り計画が固まった後にその変更を要する提案であることから、直接的な表現が避けられているものと思われる。この提案者のJP\_M3は、母語②グループの会話参加者のうちで一番の年長者であるが、自ら〈提案懸念〉を表明している発話02は、桑原(1998)が指摘した通り、上位者である提案者自身の提案取り下げの発話が提案の否決において決定的な役割を果たす事例となっている。しかし、(3)の発話連鎖では発話01の〈提案〉が完全に否決されるわけではなく、発話06~07の折衷案の〈提案〉により話題として復活する。この折衷案の〈提案〉は、JP\_M3のフェイス(Brown & Levinson 1987)に対する配慮と考えられる。このように、母語②グループによる(3)の発話連鎖からは、談話展開の中で〈提案〉がもたらす計画全体に対する影響への配慮、会話参加者同士のフェイスへの配慮が認められる。

#### 4. 3 第三者言語接触①グループ

第三者言語接触①グループによる調査データの話段に基づく談話展開は表5に示す通りである。母語場面の調査データと同様に、「アイデア出し」の話段から検討が始まり、「昼食の検討」の話段がそれに続いているが、イベントの数を計画書の空欄の数だけ揃えることを優先し、順番は後で検討している点で、他のデータと異なっている。さらに、複数の話段に分かれて検討されるイベントの数が多く、話段2, 8, 9, 21のような計画の調整・確認のための話段が多いこと、下層の話段も含めて雑談の話段がないことなどが特徴として挙げられる。

表5 第三者言語接触①グループの談話展開

	話段	発話数	%
1	談話開始のあいさつ	11	1.1%
2	アイデア出しの提案と承認	12	1.2%
3	アイデア出し	35	3.5%
4	昼食（イベント4）の検討	97	9.8%
5	大学の説明（イベント2）の検討	70	7.1%
6	サークル見学（イベント7）の検討	81	8.2%
7	授業見学（イベント5）の検討	31	3.1%
8	他の行事についての情報要求	4	0.4%
9	作業時間の確認	16	1.6%
10	これまでの検討事項の確認	14	1.4%
11	キャンパスツアー（イベント3）の検討	24	2.4%
12	質問の受け付けの検討	23	2.3%
13	大学の説明（イベント2）の所要時間の検討	29	2.9%
14	キャンパスツアー（イベント3）でどこを回るか	22	2.2%
15	サークル見学の提案と却下	38	3.8%
16	最初の行事としての大学の説明（イベント2）の検討	16	1.6%
17	サークル見学（イベント7）の検討	24	2.4%
18	午前中の行事の順番について	47	4.7%
19	授業見学（イベント5）の検討	83	8.4%
20	全体の順番について	7	0.7%
21	行事を2つ考える必要性の提起	2	0.2%
22	記念写真（イベント8）の検討	18	1.8%
23	自由時間（イベント6）の検討	78	7.9%
24	全体の順番の確認	36	3.6%
25	計画書の記入作業	172	17.4%

(4) の発話連鎖は、大学の説明に関するイベントを検討する話段5に続いて、サークル見学を検討する話段6の冒頭部である。話段5は昼食の前に行うイベントの検討であったため、「じゃ、ごはんの後、何をしますか。」というCN\_F1による発話01は、話題の転換と新たな〈提案〉を喚起する発話となっている。発話01を受けて、KR\_F1が発話02でサークルの広報を〈提案〉する。しかし、NZ\_M1は、発話05で図書館見学という追加の〈提案〉を行い、さらに、発話07ではプー

ルでのイベントも〈提案〉している。NZ\_M1による発話11の「ま、私は、女子こう、高校生じゃないか、から。」は、見学にやってくる高校生の大学体験に対する実際の希望がよくわからないということを示唆する発話である。それに対してCN\_F1は、男性であるNZ\_M1の発話11を、男性にとっては女性（であり、かつ、高校生）の希望はわからないと解釈し、発話13で、女子でも男子でも関係ないと述べている。この発話11~13のやりとりは、発話01、発話05、発話07の〈提案〉については何の態度表明にもなっておらず、(4)に抜粋した部分においては提案の可決・否決は決まっていない。

(4) 第三者言語接触①グループによるサークル見学についての発話連鎖

- 01 CN\_F1 じゃ、ごはんの後、何をしますか。
- 〈提案〉 02 KR\_F1 (1.0) なんか、サークルの広報。
- 03 NZ\_M1 ああ
- 04 CN\_F1 あ、サークル [の] [図書館
- 〈提案〉 05 NZ\_M1 [サークルを見て、図書館見て、多 [分、
- 06 CN\_F1 [図書館の紹介
- 〈提案〉 07 NZ\_M1 [そうするとなんか、そして、多分、なんか、いい所とか、プールとか、
- 08 CN\_F1 [プール? うん そうそうそう
- 09 NZ\_M1 [まあ、あ、(1.0) まあ、プールとか、ちょっと、ま、あの、 (2.0)
- 10 KR\_F1 うん
- 11 NZ\_M1 ま、私は、女子こう、高校生じゃないか、から。
- 12 KR\_F1 うん
- 13 CN\_F1 多分、まあ、女子でも男子でも同じじゃないですかね。それ、あんまり関係ない。

(4)の発話連鎖では、KR\_F1による発話02の提案について〈提案支持〉も〈提案説明〉も〈提案懸念〉も表明されていないうちに、NZ\_M1の発話05、発話07によって複数の異なる〈提案〉が行われている。このような提案行動は、ブレインストーミングの「アイデア出し」の話段であればありうるが、実質的な計画の検討段階に入ってから話段において、母語場面の調査データには見られなかった。発話01で提案を喚起したCN\_F1は、第三者言語接触①グループの談話において進行役の役割を果たしていたが、複数の〈提案〉がなされる状況において、発話04の「図書館」や発話08の「プール？」など、新たな〈提案〉に出てくる言葉を反復し、話題として取り立てている。結果として、最初のKR\_F1による発話02の〈提案〉は可決か否決か決まらないままペンディングになっている。

#### 4. 4 第三者言語接触②グループ

第三者言語接触②グループによる調査データの話段に基づく談話展開は表6に示す通りである。このグループの会話では、話段1の「アイデア出し」の後、時系列に沿って計画を立てていき、比較的早い段階で計画の第1案が出来上がった。しかし、話段8「スケジュールのまとめ」における第1案の確認、および、話段10「計画書の記入作業」の後、NZ\_M2の提案から計画の再検討が起こり（話段11～12）、順番の組み替えやイベントの追加が起きている。

表6 第三者言語接触②グループの談話展開

話段	発話数	%
1 アイデア出し	28	4.2%
2 最初の行事の検討 歓迎会	38	5.7%
3 次の行事の検討	47	7.1%
4 キャンパスツアー（イベント3）の検討	7	1.1%
5 歓迎会の検討	56	8.4%
6 キャンパスツアーで図書館以外にどこに行くか	15	2.3%
7 昼食（イベント5）の後に何をするか	30	4.5%
8 スケジュールのまとめ	30	4.5%
9 他の行事の可能性について	3	0.5%
10 計画書の記入作業	22	3.3%
11 NZ_M2の提案に対するやりとり	60	9.0%
12 計画の再検討（歓迎会を昼食と一緒に、イベント2・4の追加）	100	15.1%
13 午後の行事（イベント6・7）の検討	61	9.2%
14 計画書の記入作業	14	2.1%
15 授業見学（イベント6）の内容	16	2.4%
16 作業の経過時間について	2	0.3%
17 計画書の記入作業	129	19.5%
18 タスク終了の確認	5	0.8%

(5)の発話連鎖は、一通り出来上がった計画を計画書に記入する作業に伴う話段10に続く、NZ\_M2の提案に対するやりとりについて話段11の冒頭部である。話段10で、決まったイベントを順番に計画書に記入していき、ランチについての記入作業に伴う発話の後に、NZ\_M2による発話01が出てくる。この発話01の「体育」の体験イベントをやろうという〈提案〉に対し、TW\_F1の発話02で〈提案懸念〉が示されるが、提案者のNZ\_M2は発話03で同じ〈提案〉の発話を繰り返している。再度、VN\_F3とTW\_F1による発話04～07で〈提案懸念〉が示されるが、またしてもNZ\_M2による発話08で〈提案〉が反復される。話段8までにまとめられた計画案では、最初にお菓子を食べながら「歓迎会」を行い、その後にキャンパスツアーをして昼食をするという案であった。VN\_F3とTW\_F1による発話10～11の〈提案懸念〉は、できつつある計画案との関連から発せられたものと言える。VN\_F3による発話12の「えー」という否定的な態度表明を受

け、提案者の NZ\_M2は発話13で別の〈提案〉を行っている。

(5) 第三者言語接触②グループによる体育に関する提案についての発話連鎖

- 〈提案〉 01 NZ\_M2 ランチする前は、あの、体育。
- 〈提案懸念〉 02 TW\_F1 体育 [やる？
- 〈提案〉の反復 03 NZ\_M2 [体育の [経験をしたほうがいい。体験をしたほうがいい。
- 04 VN\_F3 [でも
- 〈提案懸念〉 05 VN\_F3 でも、[その一。
- 06 TW\_F1 [あー、でも、なんか、食べてから、(1.0)
- 07 TW\_F1 あのー、[運動したら、ちょっと。
- 〈提案〉の反復 08 NZ\_M2 [うん、食べる、た、食べる前、[運動したほうがいい。
- 09 TW\_F1 [そうそうそう
- 10 VN\_F3 え、なんか、ラ、ランチの時間は何時？ (1.0) 何時に？
- 11 TW\_F1 あ、でも、歓迎会の後は、ランチしたら。(1.0)
- 〈提案懸念〉 12 VN\_F3 えー。
- 別の〈提案〉 13 NZ\_M2 あ、ランチと歓迎会は、一緒にしたほうがいい。

(5) の発話連鎖では、〈提案〉と〈提案懸念〉が繰り返されている。〈提案懸念〉に対しては、母語①グループの(1)の発話連鎖や若野(1998)の指摘のように、提案者および提案の支持者が〈提案説明〉することによる反論で説得が行われるが、この発話連鎖では〈提案〉の発話を繰り返すのみで、〈提案説明〉を行っていない。発話13で、提案者の NZ\_M2が発話01と異なる〈提案〉を行ったことで、発話01の〈提案〉を取り下げたものととらえられる。

(6) の発話連鎖は、計画を再検討する話段12の一部で、(5) の発話連鎖の80発話後の部分である。まず、VN\_F3と TW\_F1による発話01~04はオリエンテーションの所要時間についての小話段の部分である。そこに、NZ\_M2が発話05の「うん。はい。体育する。はい。」と強い調子で〈提案〉を行っている。その〈提案〉に対して VN\_F3と TW\_F1は、即座に〈反対〉の発話を発し、発話08~09で、発話01~04までのオリエンテーションの話題に戻っている。

(6) 第三者言語接触②グループによる体育に関する再提案についての発話連鎖

- 01 VN\_F3 オリエンテーション、とー、30分くらい？ [に
- 02 TW\_F1 [30分くらいで。
- 03 VN\_F3 長 [い。
- 04 TW\_F1 [や、ちょっと説明だけで。
- 〈提案〉 05 NZ\_M2 うん、はい、体育する。はい。

- 〈反対〉 06 TW\_F1 体育？ そ [んなに (笑)。 そん [なに？ あー。  
 07 VN\_F3 [そんなに好きの？ [めっちゃ体育が (笑)。  
 08 VN\_F3 15分でいい？ (1.0) 30分？  
 09 TW\_F1 15分。いやー。

(6) がこのような直接的に〈反対〉を行う発話連鎖になっている理由としては、この提案者の NZ\_M2 が体育に関連する〈提案〉をするのがこれで5回目、それまでの4回は(5)の発話連鎖のように〈提案懸念〉に対する〈提案説明〉がなく、若野(1998)の「闇に葬られる」形で否決されてきたことが挙げられる。NZ\_M2 にとっては、「闇に葬られる」形の否決では、はっきりとした否決とはとらえられなかったのかもしれない、一方、ほかの二人の会話参加者にとっては、納得がいかない〈提案〉について〈提案説明〉がなければ考慮すべき〈提案〉とはとらえられなかったものと考えられる。(6)の発話連鎖の結果、この提案者の NZ\_M2 は黙ってしまい、途中 TW\_F1 からジェスチャーで発言を促されたりしている。そして、約50発話後、VN\_F3 と TW\_F1 は、体育館のイベントを昼食の前に設定することにした。これは、NZ\_M2 のフェイスに配慮したものととらえられる。

第三者言語接触場面の2グループによる発話連鎖に共通する特徴としては、〈提案〉についての〈提案説明〉の欠如が挙げられる。そのこのとが、(4)の発話連鎖における課題解決の進展を阻害したり、(5)、(6)の発話連鎖における会話参加者間のコミュニケーション上のずれを生じさせている。

## 5. まとめ

以上、日本語母語話者同士による母語場面と日本語学習者同士が「共通語としての日本語」を用いて話し合う第三者言語接触場面の会話データを対象に、談話展開のあり方と提案の可決・否決に関する発話連鎖について質的な分析・考察を行った。談話展開については話段、提案の可決・否決に関する発話連鎖については発話機能やストラテジーを分析の概念として用いた。

談話展開に関しては、母語場面、第三者言語接触場面の全てのグループにおいて、計画の内容を細かく検討する前にブレインストーミングを行う「アイデア出し」の話段が見られた。また、昼食の時間帯や場所を最初に検討し、それに基づいて前後のイベントを検討するグループが多かった。母語場面よりも第三者言語接触場面の方が、イベントの順番の変更や新たなイベントの導入といった計画の修正が多い傾向にあった。

提案の可決・否決に関する発話連鎖に関して、母語場面の特徴としては、〈提案〉〈提案説明〉の発話における共同発話、談話展開の中の話題の位置づけに応じた〈提案〉や〈反対〉のストラテジーの直接性への対応などが挙げられる。第三者言語接触場面の特徴としては、〈提案〉につ

いての〈提案説明〉の欠如により、〈提案〉の可決・否決が決まる前に他の〈提案〉や話題に推移してしまったり、〈提案〉が直接的に否決されない場合に対するとらえ方の違いによって会話参加者同士のコミュニケーション上のずれが生じる点が挙げられる。

最後に、「共通語としての日本語」による言語行動に関して、本研究の分析・考察から得られる日本語教育への示唆について考えてみる。「共通語としての日本語」は、日本語母語話者を会話参加者に含まない場面も想定したコミュニケーション・ツールとしてとらえられるので、それを考慮した日本語教育においては必ずしも日本語母語話者らしい日本語使用が目標とされるものではなくなる。日本語母語話者の談話展開や提案についてのストラテジーが、日本語学習者にとって必ず身につけるべきものではないとすると、どのような表現が〈提案〉、〈提案説明〉、〈提案懸念〉などの機能を持つのかを教えることが重要になってくるのではないだろうか。会話参加者に関するどのような場面においても、効果的な説得の仕方として、〈提案〉の発話だけではなく〈提案説明〉を加えることがコミュニケーション上の問題を生じさせないためにも大事だということが言える。

本研究は、AATJ 2018 Annual Spring Conference におけるパネル（竹井ほか 2018）での発表内容をもとに加筆したものである。JSPS 科研費15K0277401（研究題目：国際共修カリキュラムのための「共通語としての日本語・英語」使用実態・意識の調査 研究代表者：竹井光子）の助成を受けている。

## 参考文献

- 桑原和子（1996）「日本語の「提案」の談話の構造分析」『日本女子大学大学院文学研究科紀要』2, 1-12
- 桑原和子（1998）「会議の提案の談話における「話段」の展開とストラテジー」『国文目白』37, 33-43 日本女子大学国語国文学会
- 佐久間まゆみ（1987）「文段認定の一基準（I）— 提題表現の統括—」『文藝言語研究 言語篇』11, 89-135 筑波大学文芸・言語研究科
- 佐久間まゆみ（2006）「文章・談話の分析単位」『月刊言語』35（10），65-73 大修館書店
- ザトラウスキー，ポリー（1993）『日本語の談話の構造分析 — 勧誘のストラテジーの考察—』くろしお出版
- 竹井光子・吉田悦子（2018）「国際共修カリキュラム（相手言語接触場面）における母語話者の意識と役割」『2018 CAJLE Annual Conference Proceedings』274-283 Canadian Association for Japanese Language Education
- 竹井光子・吉田悦子・下條光明・藤原美保・渡辺文生（2018）「効果的な国際共修カリキュラム

構築のための『共通語としての日本語』話者の言語行動の分析」2018 AATJ Annual Spring Conference (2018年 3月22日 Washington D.C.) パネル発表資料 American Association of Teachers of Japanese

野原美和子・藤江希子・宮谷敦美 (2002) 「提案から同意に至る会話の分析：日本語母語話者と日本語非母語話者の課題解決を目指す会話データを基に」『岐阜大学留学生センター紀要』2001：31-45

星野祐子 (2010) 「課題解決型の話し合い活動における協働的な発話連鎖：聞き手の積極的な参与に着目して (イギリス共同ゼミ)」『大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」活動報告書』192-198

南不二男 (1983) 「談話の単位」国立国語研究所 (編) 『談話の研究と教育 I』91-112 大蔵省印刷局

若野恵 (1998) 「可決・否決のストラテジー —大学生の話し合い場面の会話分析—」『日本語と日本文学』26, 23-38 筑波大学国語国文学会

渡辺文生 (2013) 「『話段』から見た講義の談話展開」『日本語学会2013年度秋季大会予稿集』36

Brown, P. & Levinson, S. C. (1987) *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.



An Analysis of Developmental Structure and Agreement/Disagreement on Proposals  
in Japanese Problem-Solving Discourse  
A Comparison of Native Language Situations and Third-Party Language Contact Situations

Fumio WATANABE

In this study, I investigated developmental structures of *wadan*, ‘functional paragraph’, and speech sequences about agreement/disagreement on proposals in Japanese problem-solving discourse derived from native language situations and third-party language contact situations. The data of this study come from three-party conversation planning a campus tour for high school students.

Analysis of developmental structures of *wadan* shows that 1) all the groups of native language situations and third-party language contact situations had brainstorming *wadan* before they discussed their plans in detail; 2) the groups of third-party language contact situations tended to modify the order of their planning events, and to introduce new events into their existing plans.

Analysis of agreement/disagreement on proposals shows that 1) speakers of native language situations used co-construction in utterances for proposal and proposal reasons, and modified directness of their strategies for proposal or objection according to the importance of the topic; 2) speakers of third-party language situations shifted their topic on proposal to another before they had agreed/disagreed on the existing proposal because of lack of proposal reasons, and caused gap of communication by the difference in their recognition of the situation where the proposal had not been disagreed directly.

This study suggests to education of Japanese as lingua franca the importance of teaching expressions which can be used for proposal, proposal reasons, and concerns for the proposal. Effective way of making a proposal to avoid gap of communication is to make use of utterances for proposal reasons as well as ones for proposal.

